

[実践報告]

学校教育と自然系施設との連携の可能性について  
—「総合的な学習の時間」をコーディネートする試み—

田村 真広<sup>1</sup>・遠藤 真澄<sup>2</sup>

<sup>1</sup>北海道教育大学釧路校社会科教育学研究室

<sup>2</sup>川湯エコミュージアムセンター

**Possibility for cooperation with the school and the eco-museum center:  
A trial of the period for integrated study**

Masahiro TAMURA<sup>1</sup> and Masumi ENDOH<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Department of Social Studies Education, Hokkaido University of Education, Kushiro 085-8580, Japan

<sup>2</sup>Kawayu Eco Museum Center, Teshikaga 088-3465, Japan

解題にかえて: 遠藤報告から学び取りたいこと

北海道教育大学釧路校と川湯エコミュージアムセンター(以下、EMC と略す)との連携事業が 2 周年を迎えた。わずか 2 年の間に、釧路校の新入生合宿研修は名称を「道東体感フレッシュセミナー」に変更した。名称変更は、新課程学生定員の増員に促された側面はあったが、むしろ合宿研修のコンセプトがようやく固まってきたことを示す、象徴的な出来事ととらえる方が正しい。具体的にいえば、合宿研修 2 日目の企画として、EMC における自然体験学習が定着したことである。

2001 年 5 月には、EMC を利用する 3 度目の合宿研修が予定されている。2 度にわたる経験を生かしたプログラムの工夫が試みられる時期を迎えている。感性を働かせて納得しながら学ぶ、という経験をせずに、しかも不本意で入学してきた者が多いと言われる本学学生のプロフィールをふまえて、どのようなプログラムを提供すべきか。また、1 隊 80 名程度という多人数を相手のプログラムという制約をいかに乗り越えるか。直面している課題を整理して、早急に対策を講ずべきである。

一方で、学校教育の現場では、教育課程の改訂が前倒しで進められ、日々慌ただしく移行期の課題解決に迫られている。総合的な学習の時間は、各学校の特色を出す学習の時間として考案され、様々な形態で試行されている。

EMC では事業の充実が図られ、「もりのパレット」という愛称が命名された。公募による愛称の決定は、EMC の潜在力に対

して全国から強い期待が寄せられていることの証左である。EMC の活躍を期待する層の中には、学校教育の改革を真摯に求める教育関係者も少なくない。本学もそうした層の一端を担っていることは、あらためて言うまでもない。

EMC の遠藤さんは、このたび自然系体験学習施設のコーディネーターとして、和琴小学校の授業実践に参加された。この実践は以下の点で重要な意味を持っている。

第一は、学校教師と施設関係者、シカ研究者が一同に会して、授業の事前準備を行ったことである。しかもその準備を、1. 与件、2. ポテンシャル分析(地域理解)、3. マーケティング分析(対象者理解)、4. 思い、の項目ごとに整理し、3 つの内容絞り込んでいた点である。特別な時間枠をとって、自然系施設に授業時間を「丸投げ」してしまうのではなく、あるいは逆に自然系施設の者が「ゲスト」となって、話の切れ端を提供して済ましてしまうのでもない。学校側と施設側の双方がその持ち分を主張し、責任を分かち合っただけの授業づくりとなっている点が貴重である。責任を分かち合えば、成果も分かち合えるところが魅力となる。

第二は、子どもが知りたいことを、シカ博士からじかに引き出す機会を提供したことである。難しいことを臨機応変に語る、高い研究力量を持った専門家を参加組織できた点が貴重である。研究者と教育者の連携は、第一義には子どもに納得のいく学びを提供することにある。遠藤さんの役割は、シカ博士の言葉をわかりやすい言葉に翻訳することであったが、この翻

訳作業によってこそ、研究者の仕事の重要な一部分である社会的還元にも貢献できたのである。学校側は遠藤さんの役割をどのように受け止めたのであろうか。ぜひとも尋ねてみたいことがらの一つである。

第三に、翻訳作業の一つとしてのゲームの導入である。難しそうな言葉を平易な言葉に置き換えることによって「わからせる」ことには限界がある。限界というよりも、言葉によっては伝わらないことがらをどうするかという問題への対処なのである。授業で取り入れられている「Oh Deer!」は、専門分野の研究者と教育者とが共同して開発されたゲームである。「食べ物」「水」「すみか」というシンプルに厳選された要素によって、生態系の中で生きるシカの存在を実感できるようになっている。シカのみならず、あらゆる動物に転移できる内容となっている点が注目される。

第四に、環境教育の内容として、自然現象から歴史・生活文化といった社会事象にまで広がりをもたせたことである。シカを余すことなく衣食住の糧として使用した、アイヌの人々の生活文化の話題に届かせたことである。遠藤さんの実践記録では、鮮烈な印象を与えられた授業の後で、子どもたちが新鮮な眼差しや手触りをもって、シカそのものやシカ博士と接している姿が描写されている。しかし、シカと子どもとの関わりは、この授業実践のあとにこそ注目すべきだろう。人間や自分を見つめる目がどれだけ育っていったのか、今後を見守りたいところである。また、環境教育における歴史・生活文化の視点への広がりや、今後の EMC の展示構成や体験プログラムの充実につながる視点としても重要である。

そして第五に、和琴小学校との連携授業の成果をふまえて、今後の教育大学における教育実習や、教育関連科目の授業のあり方に一石を投じている点である。「自然に目を向ける!」ことから素直な学びを始めることのできる教師の卵は、いったいどのようにしたら育てることができるのか。まずは、和琴小学校と EMC が着手したことと同じように、釧路校と EMC とがカリキュラムの共同開発に乗り出さなくてはならないだろう。また、教育実習のオプションとして、この実践のようなケースを想定しておく必要もある。遠藤さんの描く教師像は、未来の教師像であるとともに、地域に生きる親あるいは大人のあるべき姿としても描かれている点を重く受け止めておきたい。「道東体感フレッシュセミナー」の事前指導として開講される「地域体験セミナー」が、その手がかりとなるであろう。今後ともいっそうのご協力を賜りたい。

[以上、田村真広]

## 1. 和琴小学校での授業

「シカは悪さしに畑に来ると思っていただけ、そうじゃなくて、ただ来ているんだということがわかった。」

小学校でシカの授業をした時の子どもの感想を聞いて、授業をして本当によかったと思った。この日は、地元弟子屈町の和琴小学校でのふるさと学習の時間。川湯エコミュージアムセンターへ「シカの話をしてもらえませんか？」と依頼が来た。子ども達に自分の住んでいる地域のすばらしさを感じてほしい、野生動物もみんなと同じように一生懸命生きていて心にとめてほしい、という思いを胸に今回の授業へと挑んだ。この授業が成り立たせることができたのは、多くの人の協力に依る。その過程を見ていながら、今後の学校教育と自然系施設の連携の可能性を探っていきたい。

## 2. 研究者との連携

私の大学での専門は、野生動物の生態研究であった。北海道をフィールドに、ヒグマ、エゾシカ、エゾリスの生態を調査するため、野山を歩き回った。雄大な自然の中に身を置き、野生動物の生命力に圧倒される時間の連続であった。このような経験を通し、自然を理解するだけでなく、たくさん仲間や恩師に出会った。彼等とのつながりは、今の仕事の中でも大きな財産となっている。

現在の仕事では、直接研究はしていないが、間接的に研究と関わっている。「ヒグマ」「エゾシカ」の生態をテーマにした体験学習は、この2年間で計12回行った。そのほとんどが、現役の研究者との共同で作上げたものである。道東地域で野生動物を研究している仲間とともに、毎回楽しみながら、思いを形にする作業をしている。今回の和琴小学校での授業も、エゾシカ研究者の協力により実現した。

## 3. 学校の先生との連携

和琴小学校とは、去年のふるさと学習からのおつきあいである。「自然の話をしてほしい」との依頼があり、ヒグマ研究者と共同で授業を行った。子どもはとても積極的に授業に参加してくれて、自然への理解を深めることができた。和琴周辺にいる動物では、ヒグマよりシカの方が身近なこともあり、「ぜひ次はシカの授業を」という話があった。

今回担当してくれた鈴木文華先生には、事前準備から事後に至るまで多大な協力を頂いた。学校側からの依頼内容を詳細に伝えてくれ、また子ども達へ事前学習やふるさと学習で知りたいことなどのアンケートをとって下さった。授業内容を検討する打ち合わせでは、子どものシカに対する関心、授業態度などについて貴重な意見をいただくことができた。鈴木先生がいなかったら、今回の授業は成り立たなかったであろう。

#### 4. 事前の準備－ねらいの設定

北海道東部のエゾシカは、1980年代より急激に増加し、農業被害、森林被害などが深刻となっている。北海道は、畑と森林の境界にフェンスを設置するなどして被害対策を行うと同時に、シカの数を減らすため捕獲圧を高くする対策を進めている。成果はあがっているものの、依然シカの高密度な状態は続いている。

ここ和琴周辺も畑作地帯であり、シカによる農作物被害が問題となっている。また、国立公園内でもあり自然を楽しみに訪れる人も多く、観光業が営まれている地域でもある。このような和琴小学校において、事前に実施したアンケートの結果、21人中、シカが「好き」と答えた子どもは10人、「きらい」と答えたのが7人、「やや好き」1人、「ややきらい」2人、「どちらでもない」1人という結果になった。「きらい」と答えた理由は「畑を荒らすから」「交通事故があるから」「凶暴だから」などであった。また、「好き」と答えた理由は、「かわいいから」「おいしいから」などであった。シカについて知りたいことを尋ねたところ、「なぜオスだけ角があるのか?」「なぜ冬眠しないのか?」「どんなところに住んでいるのか?」「何を食べているのか?」「おいしい料理の仕方」などがあがった。

このような背景を参考に、授業内容の立案を実施者が集まり協議した。エゾシカ研究者の伊吾田宏正氏、桜木まゆみ氏、ヒグマ研究者の福島豪氏、和琴小学校鈴木先生、及び私の5名が意見を出し合って、以下の過程を踏んで、授業の流れを考えた。

##### ①与件

場所:和琴小学校 視聴覚教室  
 主催者:和琴小学校  
 時期:2001年3月5日(月)  
 期間:4・5時間日(1時間35分)

対象者:全校生徒 小学1年生から6年生 計22名

##### ②ポテンシャル分析(地域理解)

- ・ シカが身近にいる環境
- ・ 畑作/観光/酪農などの産業
- ・ 国立公園の豊かな自然(森/湖/温泉/峠など)がある

##### ③マーケティング分析(対象者理解)

- ・ シカは身近な動物で、興味・関心が高い
- ・ 農家の子の家では、シカの被害に困っている
- ・ 都会から移住してきた子もいる
- ・ 活動的な子が多く、体験的な学習を好み、意欲的に取り組む
- ・ 率直に自分の意見を話せるが、聞く時と話す時のけじめがつきにくい時がある
- ・ 慣れない雰囲気や場面によっては、自分の思いを表現できない時がある
- ・ 高学年の子は、多角的に物事が見ることができ、より本質的なもの、現実面での考えや行動を求めるようになる
- ・ シカに対する興味:上記アンケート参照

##### ④思い

- ・ 主催者側「体験的な活動を通して、シカ本来の生態を知り、野生動物が身近にいる環境のすばらしさを実感したり、人間と動物の共生について考える。」
- ・ 実施する側
  - 思いその1「シカも人も自然の一部」という見方を大切にしたい
  - 思いその2 シカの本来の生態を伝えたい
  - 思いその3 シカの多様な価値を知ってほしい

以上、①から④をまとめ、

- 内容その1 シカの生態を解説(体/食べ物/暮らし)
- 内容その2 シカと人間の軋轢をシカの側から考えてみる
- 内容その3 シカの多様な価値、利用方法を知ってもらうという、3つの内容とした。

実施する側の思い「シカも人も自然の一部」という見方にこだわった訳は、その延長上にこそ、人と自然が共存できる持続可能な本当に豊かな生活があるのではないかと私達が考えるからである。「多様な価値を知ってほしい」という思いも自然との共存に行き着く。シカの被害だけを考えると、一頭もいなければいいという結論もあり得るかも知

れない。しかし、シカが有効に利用できればシカの価値は高まるし、また存在そのものに無形の価値を認めることもできる。かつて北海道の先住民族アイヌの人々は、シカを利用しつつ共存の道を実現していた。現在の被害を出す悪いやつという一方向からの見方以外も、子ども達に知ってほしいと考えた。

## 5. 本番一子ども達の目の輝き

授業のお題目は、「シカ 知ってるつもり?! シカの生活と人」である。

教室で準備をしていると、興味深そうにのぞきに来る子どももいる。直前まで打ち合わせをしつつ、本番突入である。私が入前で話をする仕事を始め2年が経とうとしている。最初の頃、緊張で頭が真っ白になっていた自分と比べると、大分度胸がついたと思う。特に、野生動物は得意分野なので、子どもの反応を楽しむ余裕すらもてた。

まず、子どもの家で飼っている動物について質問する。『動物が生きていくためには何が必要ですか?』子ども達は、自分の家にいる犬やねこ、羊や牛を思い浮かべているような意見を出してくれた。それらを「食べ物」と「水」と「すみか」の3つにまとめる。『シカは人間に飼われていないけれど、犬や牛と同じ様に、生きていくためには「食べ物」と「水」と「すみか」が必要なのです。シカがどんな暮らしをしているか、シカ博士伊吾田さんにお話をしてもらいましょう。』という導入によって授業は始まった。

### 「シカの体・食べ物・くらし」

春夏秋冬と四季を追って、シカの暮らしを紹介する。『春は何を食べていると思いますか?』たくさん手が上がった。シカの頭骨を使い、食べ方を真似る。胃が4つあり、反芻して消化することを説明する。『夏になると、子どもが生まれます。シカの赤ちゃんは、どれくらいの重さかな?』6月に生まれた時は人間の赤ちゃん約2人分の重さ、お母さんは伊吾田さんと同じ70キロくらいだ。『秋、シカは結婚のシーズンです。この時、オスの角はある大事な役目を果たします。』オスの強さは決闘で決まり、強いオスは多くのメスを得ることができる。角を見せつつ、角は毎年生え変わり形が年齢とともに変化することを話す。『冬、この教室の窓の外に見えるような松の林が、シカのすみかとなるんですよ。[冬はシカにとってもつらい季節である。子どもへ質問を投げかけつつ、身近な物事を例えに用いながら

話を進める。子ども達は、予想以上にシカのことについて詳しく、熱心に聞いたり答えたりしてくれて、説明をする伊吾田さんにも熱が入る。

ここで一息、「Oh Deer!」というゲームをする。子ども達は教室を楽しそうに走り回りながら、シカの数が増えたり減ったりすることを学ぶ。プロジェクトワイルドというアメリカで開発された環境教育効果のある一連のゲーム群の中のひとつである。シンプルでいて、理解度の深い洗練されたゲームである。アメリカでは、研究者と教育者の連携がよくできていると改めて感心させられる。

### 「シカと人のあいだでおこっていること」

次に、シカのことだけでなく、人と関係について考える。シカと人の軋轢をシカの側から考えてほしいと思い、ロールプレイを取り入れた。シナリオを用意し、私達実施者が台詞を言い、それにあわせ子ども達が動くのである。シナリオは、「畑の作物をシカが食べて困ったぞ(シナリオ1参照)」と「車で走っているとシカが飛び出してきて嫌だな」という2つのお話である。

主人公はシカ、脇役は人間。どちらも5分程度の簡単なものであるが、出演してくれる子ども達を選んだり、子どもに前に出て演じてもらうので、子ども達は大いに盛り上がった。名演技を見せてくれる子どももいる。各劇を終えるとシナリオの内容をもう一度説明し、伊吾田さんにシカがなぜそういう行動をしてしまったのか、人間はどういった対処をするのが善いかについて、解説をしてもらう。例えば、シカは人間は困らせようとして畑の作物を食べているのではなく、畑のようなおいしい作物がまとまって生えている畑があると、餌を食べたいばかりに手を伸ばしてしまうのだ。人間側がシカが入って来れないフェンスを畑に張るなどして防ぐ工夫が必要だ。また、シカの数調節する必要もある、ということも語った。子ども達の、笑い声をあげながら劇に参加し、説明をするときは真剣に聞いていた姿が印象的であった。

「シカがいて困ることもあるけれど、いいこともあるよ。」

最後にシカに様々な利用価値があることを伝える。アイヌの人々は、シカの肉だけでなく、骨、皮、角、腱など、余すことなく衣食住の糧として利用していた。なめした皮やアキレス腱でつくった紐を見せながら話しをした。子ども達はそれらを手にとって、興味深そうに見つめていた。シカ肉を食べたことのある子は多かったが、肉だけでなくもっと積極的な活用をすべき、という見方は子どもにとって意外であったようだ。シカのもつ価値、すなわち人間にとっての利用価値、そして命として存

在している価値を、子どもは十分に理解してくれたように感じた。

## 6. 授業を終えて

授業が終わると、子ども達はシカの骨や角、シカから作った

皮などを手にとって、じっと見つめたり、私達に話しかけたり飛皮などを手にとって、じっと見つめたり、私達に話し掛けたり飛びついたり、興奮覚めやらぬ様子であった。先生にお願いし、翌日子どもの感想を聞いてもらったところ、次のような感想が届いた。

「シカは悪いことをしに来ているのではなく、生きるためのこ

### シナリオ 1: 畑の作物をシカが食べて困ったぞ

ナレーション 親子のシカが餌を探して歩いています。

子ジカ お母さん、お腹すいたよ。

お母さんジカ そうね、もう少し歩くとふきのとうのある場所があるから我慢してね。

子ジカ おいしいよね、ふきのとうって。

お母さんジカ 冬の間、ササや木の皮しか食べられなかったものね。

子ジカ 春になって、いろんな草がでてきてうれしいな。

お母さんジカ ほら、ここよ。ふきのとう。

子ジカ わーい、おいしいな。

ナレーション お母さんシカと子シカは夢中で草を食べました。

@ (子シカは母シカから離れる。)

子ジカ あれ、お母さんがいない。

ナレーション 木がつくとお母さんとはぐれていました。

子シカは、お母さんを探して走り出しました。何かにおいがするので、足を止めました。

子ジカ くんくん、いいにおいがするぞ。

ナレーション そこは、畑です。

子ジカ あそこにあるのは、なんだろう？

ナレーション 森の縁まで行って、畑に近づきました。畑には野菜がうえられています。

子ジカ 見たことない草だなあ。でも、おいしそう。

ナレーション 野菜からはいいにおいがしています。

子ジカ 木が一本もはえていないから、隠れる場所がなくて恐いな。

ナレーション 子は畑のような明るい場所が怖いと思いましたが、勇気をだして畑にでて、野菜をひと口食べてみました。

子ジカ おいしい。

ふきのとうより甘くて、栄養がたっぷりな味がする。  
それに探さなくてもここにこんなにたくさんあるんだもの。  
お母さんに教えてあげよう。

ナレーション 子シカはあんまりおいしいので、長い時間食べ続け、畑のまん中まででてきてしまいました。

そこを通りかかった農家の人が、シカを見つけました。

ハンター あ、シカが畑にでてるぞ。

あいつら苦労して育てている野菜を、、、許さん。

ナレーション ハンターは鉄砲をシカにむけました。

ハンター ばーん！！

ナレーション その音を聞いて、お母さんシカが畑の方へ近づき、畑のまん中にいる子を見つけました。

お母さんジカ こっちよ。はやく逃げなさい。

ピヤ、ピヤ。

ナレーション お母さんは、ピヤピヤと警戒音で子シカを呼びました。

ハンター ばーん！！

子ジカ お母さん、恐いよ。

ナレーション 子シカは命からがら逃げました。

お母さんジカ 危ないじゃない。もう畑にでてはダメよ。

子ジカ あー、恐かった。でも、あのおいしい草また食べたいな。

とをしているし、これは人間のものだとは知らないから、シカは悪くないんだよということがわかった。」

「シカの気持ちは人間にわからない。人間の気持ちはシカにわからない。」

「人間が山に道路を作ったからシカはわからなくて出てしまう。人間がゆっくり運転してシカができてきた時ひかないようにする。」

「来年は僕は卒業していないけれど、いろいろ在校生に教えてあげてください。クマやシカだけでなくいろんなことも知りたかった。シカのここといっぱいわかりました。」

子ども達はシカの命を尊重することを本能的に知っている。シカの気持ちはわからないけど、シカの気持ちを想像する。シカは人間と同じ、ただ一生懸命生きていただけということが、スッと入っていく。このような純粋な感情が子ども心に育まれたこと、そして何よりも子ども達の輝く瞳と笑顔は、私達にとって最高の御褒美だ。人と自然の共存へほんの一步だけれども進んだ、という確かな手ごたえがあった。

## 7. 事後— やってよかったこと

子ども達にとって身近にいるシカだが、今まで知っているようでいて、実は知らないこともたくさんあるんだと気付いたことは大きな意味があると思う。物の見方の視野が広がり、自分の足元を見つめなおすきっかけになったであろう。身近だからわざわざ取り上げないで済ますことは多いが、改めてその部分に焦点をあてて見せることで、その良さを再発見したり大切さを考えることに繋がる。自然の豊かな場所で暮らす子どもに対しても、あえて自然について教えることは重要だ。それは、子どもだけでなく、大人にとっても同様であろう。

また、先生方と話しをする中で、先生方が子どもの気持ちに添って深い理解と愛情を持ち、よりよい教育のため努力していることが強く伝わってきた。このような情熱は、私のような学校以外で教育活動をするものにとって、協力して環境教育を実現できれば、との心意気を刺激される。今回の授業で生まれた信頼関係をきっかけとして、今後よりよい連携をとっていきたいと願う。

また、研究者の知識や技術のみならず、研究魂ともいえるシカに対する熱い思いが今回の授業を支えてくれた。彼らの生の声のもつ力は大きい。研究者にとっても、自分の研究対象や結果に多くの人々が関心を抱いてくれること、直接的な

社会還元ができることの喜びは大きいであろう。私にできることは、研究者の言葉を分かりやすく一般の人々に伝え、一般の人のニーズにあった研究成果の活躍する場を創出することだと考えている。

これらの活動を通じ、人と自然との共存、精神的に豊かな暮らしができる社会の実現へ、一歩一歩を歩んでいければ幸いである。

## 8. 総合学習の可能性

ここで、学校教育と自然系施設の連携の可能性を探ってみよう。今回は、研究者が演じ手となり、私は進行役であった。実際の業務は、私が進行役と演じ手を共にすることがほとんどである。自然系施設が学校から依頼を受けて、実施のお手伝いをする場合を考えてみよう。

まず、学校と施設という関係から、人と人の関係となるところから始まる。「学校側は何をねらいとしているのか?」「子ども達にどのようなことを伝え感じてほしいと思っているのか?」といった先生方の本音からすべては始まる。そして、その思いに応え、また実施側の思いも乗せて、企画づくりが始まる。

私達自然系施設スタッフの抱いている「子ども達に自然の大切さを理解してもらいたい、日常でも身近な自然に目を向けてほしい」という願いは、そのまま先生方へ発しているメッセージでもある。日常的に子どもに一番接しているのは、先生方である。専門的な知識や技術は必要なく、自然に対する関心があれば充分である。ささやかなことでも子どもと一緒に自然にふれることから始めてほしい。環境教育で伝えるものの中で、「自然に目を向ける」というさりげない気持ちに勝るものはない。一番身近な先生だからこそ伝えられるものもある。その自然とのふれあいを重ねるうちに、より具体的に、子ども達に知ってほしいこと、体験してほしいことが生まれてくるだろう。その時、私達はその思いを伝えることのできる場に参加させていただけばうれしい限りである。そのために自然の専門家がいるのだから、差し出がましいが大いに利用して頂きたい。子どもにとってはいつもと違う人、学校とは異色な人と接するというだけでも新鮮さがあるであろう。

先生方の子どもへの接し方、子どもへの愛情に、私はいつも感銘を受ける。授業内容ができる過程で考えたように、伝える対象についての知識/伝えたい思い/参加者に対する理解のどれかが大切である。そのバランスは、学校の先生と自然

系施設のスタッフが力をあわせることで、よりよいものとなる。

そして、単発の授業だけでなく、継続的なかわりができる  
と尚良い。最初はやはり入門編から入るので、何回か長期的  
に関わることで、より深い内容とじっくり取り組むことができるか  
らだ。そういった意味では、近くにある学校と施設同士の絆は、  
大事に育てていきたい。

## 9. 釧路教育大との絆

この2年間、釧路教育大学の新入生研修を川湯エコムー  
ジウムセンターで受け入れている。先生方とお話する機会を  
重ね、実習に対する先生方の期待も理解できるようになった。  
学生が4年間過ごす道東の雄大な自然、自然に根ざした文  
化、活力ある人の営みに触れてほしい、それらを自分の体験  
の中からつかみ取ってほしい、という思いだ。私自身もそれに

共感し、その思いに応えたいと思う。また、私自身がこの実習  
を通して学生に期待することは、道東の自然に興味を持ち、  
大切に考える気持ちを養い、また川湯エコミュージウムセンタ  
ーの活動にも参加したり、協力してくれる関係をつくるきっかけ  
となることだ。このような施設や自然があるんだ、こんな仕事を  
している人がいるんだ、というだけでも感じてくれれば、うれしく  
思う。

そして、密かに一番期待しているところは、次のようなことだ。  
教員の卵である彼らがいつか先生となった時、子ども達が自  
然とふれあうきっかけをつくってあげてほしい。それは、先生  
自身が教えてあげてもいいし、身近な自然系施設を利用して  
くれてもいい。先生にならないとしても、次世代を担っていく若  
者である。親として、大人として、子ども達へ地球の自然の大  
切さを伝えていってほしい。そんな希望をもって、釧路教育大  
の新入生を迎えている。

[以上、遠藤真澄]